

令和6年度 第1回瀬戸市ICT活用・DX推進協議会 議事録

開催日時	令和6年7月8日（月） 午後2時から4時まで				
開催場所	瀬戸市役所 北庁舎4階 庁議室				
出席委員	9名	欠席委員	1名	傍聴者	1名
事務局	瀬戸市 情報政策課 梶田課長、竹山課長補佐、大矢主査 水野主任、山田主任、大澤主任				
議 事					
1. 瀬戸市挨拶 （川本市長） この協議会も、令和3年度から始まり、今年度で4回目の年を迎えます。 引き続き本協議会にご参画いただいています委員様におかれましては、今年度もご就任をいただき、心より御礼申し上げます。 本市ではICTを効果的に活用し、デジタルトランスフォーメーションを推進するため、この協議会において、委員の皆様の助言をいただきながら、これからも進めていき、DXの推進により、市民の皆さまの生活の質を向上させるとともに、市の運営を一層効率的かつ透明性の高いものとし、その結果、市民の皆さまが「住みやすいまち」と実感していただくとともに、職員が「働きやすい職場」と思えるよう推進していきたいと思いますので、委員の皆様からの、大所高所からご助言・ご示唆を賜りますと幸いです。 今年度も皆さんどうぞよろしくお願いいたします。					
2. 委員紹介 （安田委員） 今年度4回目ということで委員の皆様、どうぞよろしくお願いいたします。 名古屋大学では、情報学研究科社会情報学専攻というところで、情報社会設計論という講座を主催させていただいております。 瀬戸市をはじめいろいろな自治体のDXに関していくつか参加させていただいておりまして、ぜひ皆さんと一緒に瀬戸市のDX推進をさせていただきたいと思いますのでどうぞよろしくお願いいたします。					
（後藤委員） 私も4回目になります、どうぞよろしくお願いいたします。 金城学院で、専門は社会情報学という分野を専門としております、最近流行りの映像を活用したのに関して学生とコンテンツ作りをさせていただいている一方で、瀬戸市民として地域の組長をやらせていただいております。					

その視点からもDXに対し一つの効果でも実感できるよう、お力になればと思いますのでどうぞよろしくお願いいたします。

(穴山委員)

令和4年からこの委員会に参加させていただいて、今年で3回目になりました。会社では公共・社会事業グループといいまして、自治体様の他、官庁や電力、あと交通といった幅広い分野を担当させていただいております。

今は、やはり今年と来年がピークになる標準化対応とガバメントクラウド対応といったところに追われているところではございますが、DXともう一つデジタルの推進といったところが必要だと思っておりますので、瀬戸市の皆様にできるだけ自分の知見を生かせるように頑張っていきたいと思っております今年もよろしくお願いいたします。

(高田委員)

私自身は、どちらかというと社内で業務・組織、全体を見て推進するという内部的な仕事が多いところではありますが、あわせてお客様先に直接出て、という、このような形での活動もしております。

弊社は自治体様だけでなく、他のお客様も含め、活動をさせていただいており、その中で私どもが役立てるものがあると考えております。今後ともよろしくお願いいたします。

(藤川委員)

昨年度に引き続き今年もよろしくお願いいたします。

私の方は去年から業務は変わらず、デジタルガバメントを推進する立ち位置として政策の分析であったり政府への提言ということを手がけながら、今この行政を自分で何をDXしていくべきかというところを変わらず取り組んでおります。

ただ、これから先は、行政機関だけが頑張るのではなくて、民間も一緒に官民連携でデジタルのトランスフォーメーションを目指していくというところ、技術も我々にわかりやすいような生成AIも出てきましたし、こういうものをどんどん活用してDXを進めていきたいと思っておりますので、皆さん今年もよろしくお願いいたします。

(原委員)

昨年までは西陵連区で会計を担当しておりましたが、今年から防火防災担当になりました。本日は、防火防災についてもICT化、DX化がうまく活用できないかというところも考えながら参加をさせていただいております。

今年もよろしくお願いいたします。

(寺田委員)

初年度は教育委員という立場で教育の部分のことをお話させていただきまして、翌年度から地場産業ということで出席をさせていただいておりますけど、我々は瀬戸の伝統

産業である焼き物をなりわいにしています。

我々ですとリアルな売り場がいろいろある中でやはり E C の分野も広げないとなかなか厳しい状態なのですが、手作りの物は写真で載せて、これが欲しいと言われても届いたものが写真と違う、ということは本当にあったので少しいろいろ勉強させていただきたいと思っております。

市民という立場では先ほど市長がおっしゃられたように、D X とかを実感できるようなことがなかなか、私も 4 年出席させていただいている中でこれというのが自分で感じる部分も少ないものですから、会議の中でいろんな発言が建設的にさせていただければと思っておりますので、1 年間どうぞよろしくお願いします。

(駒田委員)

この会議の前に瀬戸市の来年度の予算も含めた実施計画の検討を行っていましたが、教育委員会として、教育 D X をどういった実施計画にしていくかというのを侃々諤々とやっておりました。

時間があればご紹介させていただきますが、瀬戸市も含め学校は D X、I C T が進んできた実感しているところです。

ここでの議論の結果を教育の場に、教育委員会に持って帰ってしっかり進めていきたいと考えておりますのでよろしくお願いします。

(大森委員)

昨年の 6 月から就任いたしました 1 年と少し経ちました、行政機関のいろいろなところを把握しながら、この D X に関しても非常に行政は弱いところを実感しております。

昔を考えますと、行政はたくさん書類を持って、その書類がたくさんあるところが行政として栄えているというような時代もあったかと思います。

少し前にコロナがありましたけれど、教育部長が先ほど述べましたが、このコロナによって子供たちの D X、I C T というものがすごく進化をしました。

我々も子供たちに負けないように、という思いで今、行政の中でも D X を進めている次第です。

最終的な目標としては、今までとは違って、市民の皆様が市役所まで足をお運びいただくなくても、いろいろな生活環境が整うといったところを最終的には目指していきたいと思っておりますので、私も勉強しながら、皆さんと共に進めていきたいと思ひます、よろしくお願ひいたします。

3. 会長・副会長選任

(会長の選任)

協議会設置要綱第 7 条第 2 項に基づき、会長の選任について出席委員に諮ったところ、穴山委員から安田委員の会長就任の推薦があり、拍手をもって承認された。

(副会長の選任)

同じく協議会設置要綱第7条第2項により、安田会長からの指名によって後藤委員が副会長に選任された。

(安田会長より挨拶)

今回もぜひ瀬戸市のステークホルダーの皆様、日々の生活の中からご意見をいただきたいと思っておりますし、民間企業からの参加の皆さんもぜひ先ほどご紹介いただきました、全国的な規模であったり、政府の動向であるとかそういう視点からぜひ、この瀬戸市のICT活用DXについて、ご助言いただければと思っております。

4. 議事（事務局説明）

「瀬戸市DX重点取組み事項のロードマップ」の前年度実績及び今年度予定について報告資料にて事務局から状況を説明した。

5. 各委員と事務局による質疑応答・意見交換

(安田会長)

お気づきになった点とかあるいはご質問されたい点等につきましてご意見をいただきたいと思います、皆さんそれぞれお感じになったこととかいろいろお持ちになっていると思いますので、1巡目のご発言をいただいてその後、時間が許せばフリーで意見交換させていただきたいと思いますのでよろしくお願いします。

まず初めに穴山委員からお願いしてよろしいでしょうか。

(穴山委員)

本年度の計画を見させていただき、昨年度は17個の項目ということで、それが今年度の計画18個と、どこが変わったかの比較をしましたら1番の自治体フロントヤード改革が増えていると思っております。

こちらのフロントヤード改革は、世の中的に言うとか書かない窓口と言って、多分瀬戸市役所さんに来ると、住民票を取るために、交付申請書を記入されていると思いますが、最近私の地元もそうですが行くと、そういう記帳台が全部撤去されていて、いきなり窓口に行って、免許証とかマイナンバーカードを見せると、「何が必要ですか？」と口頭で聞かれて、証明書を発行していただけるというのが、今流行りなのか、昨今システムを刷新されているところが導入されているのかと思っております。

ただそういった書かない窓口は市庁舎における課題もありますし、窓口自身が、出張していったり、車にパソコンを載せて、過疎地域の方に行って、そこで窓口業務が対面的にできるとか、あとはもう普通にインターネット上から事前に申し込んでおくとQRコード等で事前に申し込んであるので、行けばすぐ取れるというような、そんないろいろなやり方があると思っておりますので、多分そこは市のポリシーによって書かないという意味

がいろいろ違ってくるところではないかと考えておりますので、ぜひ相談していただければ、こういった事例等をご紹介していきたいと思っております。

あともう一点、昨年来文章生成A Iを、チャットボットへ活用されているとのことだったのですが、それ以外でも多分、生成A Iは今、例えば我々今普通にこのパワーポイントであったり、E x c e lといったようなものが世の中に出てきて、非常に事務の効率が上がってきたと思っています。

生成A Iも特別なものではなくて、さらに進化したツールというように思っていただけると、例えば文章からコンテンツ資料を自分で一からデザインしなくても、パート、まずスライドを起こしていただき、それを手直ししていけば、相当今までかけていた時間が半減できたりするのではないかと考えておりますので、そういった場面でも使えるようなことを検討されたらどうかと思い今日は聞いておりました。

(安田会長)

どうもありがとうございました 2点ご指摘といいますか、ご意見をいただいたと思います。

書かない窓口とか生成A Iについて、事務局の方からコメントいただければと思います。

(事務局 梶田情報政策課長)

このスマート窓口と呼ばれるフロントエンド改革ですが、ガバメントクラウドでシステムを導入し、各自治体がシステムを組み合わせ使っていくよう考えていますので、その今準備段階ですので、我々も情報収集したいと思っています。

また、先ほど言っていた書かない窓口に関しましては、窓口業務を委託している会社がシステムを導入してしまして、免許証かマイナンバーカードで、氏名や住所が自動で印刷され、あと必要項目を記入するのですが、その後がアナログになっていますから、できれば標準化システムのバックヤードの仕組みを構築したところで、それとの連携はR P Aや他の仕組みを使って、あるいは、電子申請でスマホとか自宅からでも申請できる端末を庁内に持ち込めば、そこから同じところにデータが集まるということもできると思いますので、そういった方法を考えながら、D X推進員に意識付けをしているのですが、やはり現場の方が課題を一番認識していると思いますので、目に見えない部分の問題があるといけませんので、そういったところを現場と一緒に考えて進めていこうと思っています。

あと生成A Iですが、昨年度は一つの例としてA Iチャットボットの回答を最初から自分たちで作るのではなく生成A Iに作成させ、それを現場に確認してもらい、かなり省力化できたと検証でき、使い方さえ間違えなければ生成A Iは役に立つものだということで、今年度6月に職員向けに生成A Iの研修を行い、それが仕事に活かせるところの意識付けをして、今アンケートを募集しているところで、その結果を示し予算要求をし、導入できればと進めているところです。

(安田会長)

生成 A I についてもご指摘があったのですが、多分業務の中でいろいろと、市役所の中で取り組みを始められたと思いますが利用するデータは多分インターネット上のデータを使われていると思いますが、市役所の中でそのデータを自分のところで作るという流れは今のところまだないのでしょうか。

(事務局 梶田情報政策課長)

今年度行った研修はインターネットの情報を使う形で進めていますが、どの形がベストなのか、やはり L G W A N 内で安全に自分たちの資料を記憶させ、職員として F A Q が充実するとかはイメージがつきますが、それ以外の新しい情報はどうやって更新していくのかがまだ勉強不足で、どちらが有効なのかがまだ、見極めきれていないので、当然 L G W A N 内あるいは閉鎖区域内であった方が安全ですし自分たちの情報を与えた方が、当然精度の高いものにはなと思っています。

そのあたりを見ながら、選定していければと思っています。

(安田会長)

わかりましたありがとうございます、庁舎内のデータについても生成 A I に覚えさせるためのデータの整理、その辺りもぜひお進めいただければと思います。

次に高田委員よろしく願いいたします。

(高田委員)

デジタル化が進んでいき、やることが非常に多いということで、非常にご苦労されていると感じ、ある意味感謝ばかりだと思い、説明を聞かせていただいていたいました。

少し私も気になった点、同じようなところですが、二つほどございます。

質問という形になりますが、一つは 1 番の自治体フロントヤード改革の推進というところですね。

それこそ今システムの標準化で大変お忙しいところと思いますが、これが標準化された中でフロント業務の D X 化が進展することにより、成果を一番出しやすいところでもあると感じたんですが、当座のところでどんな業務から取り組むのか展望が描けているものがあったらお教えいただけたらというのが一つ目です。

二つ目なのですが、13 番の O C R の話、14 番の R P A が気になったところであります。

昨年度の資料も拝見させていただいたところで、やはり苦労されているのだと思うところが、ツールを使える人を庁舎の中で増やしていこう、という取組に力を入れられており、何とか行政事務の効率化を推し進めていこうと強く感じました。

例えば、という話になりますが、私どもの職場でも、ツールを使えたら非常に便利なのですが、なかなか使いこなせる人を増やしきれてないという課題がある中で、私どもの職

場の話になってしまいますが、効率化に対する希望だけ言う人と、実際作る人を分けて、できるだけ、効率化できる取組を増やしていき、生産性を上げようという形にして、少しでも前に進むよう工夫しています。

庁舎の中で、今の状況でいくと、さらに活用していくにあたり、どの辺が課題になっているのかお聞かせいただければと思います。

(安田会長)

結構具体的な質問ですけど、お答えいただけますでしょうか。

(事務局 梶田情報政策課長)

先ほど申しました通り標準化を今進めているところですので、バックエンドのシステムが決まらないことには、フロント業務からどうやってデータを連携させるかというところを考えていかなければと、まだどんな形が最適かというの、まだそこまでは踏み込んで検討していない状態ですが、冒頭に副市長が申しましたとおり、来なくてもよく、来た場合にでも手間がかからない市役所、相談したい人は窓口で懇切丁寧にお答えする、と三つのパターンにわかれると思いますので、まず来なくて良く自宅でできればいい、あるいはコンビニでできればいい、ただ来られた方は早く終わるようにということを考えると、申請書は書かなくて良く、データ連携ができればベストだと思います。

これは冒頭に寺田委員から発言のあった、目に見えるところになってくるとと思いますので、力を入れたいと思っていますが、現場の協力も必要となりますので、上手く進めていきたいと思っています。

その際にオムニチャネルと言われる、窓口で入ってきたデータ、あるいはインターネットを介してオンラインで入ってきたデータが別々になってしまうと、両方を処理しなくてはならず、それを同じ仕組みで連動させれば、より一層待ち時間の短縮になるかと考えており、現場には、実際の流れのどこにボトルネックがあって遅いのかを判断してもらい、うまく融合できたらとの理想を目指して進めていきたいと思っています。

もう一つ、A I - O C RとR P A、これに関しては、やはり使うと便利だということがわかってきたので、年に2回行っているD X座談会で、D X推進員の方々に対し成功事例を伝えています。

R P Aに関してはやはり得手不得手はあり、操作研修を通して、なるべく多くの方に体験してもらえるように進めています。W i n d o w sの更新であったり、仕組みが更新されていくと手直しが発生するので、そういったところを見極めながら、業務への適用を考えていくところが課題だと思っています。

(安田会長)

フロントヤード改革の話が、お二方からありましたが、市民の皆さんも結構便利になったという感覚は持って見えますか。

(事務局 梶田情報政策課長)

コンビニの交付とかはやはり便利になったという中で、市役所に同じ端末を置き、一度端末操作を経験した方が次回は来庁しなくて良くなったとか、アンケートを取ったわけではありませんが、コンビニ交付率が上がっているということは、それだけ利便性が向上していると思います。

あと書かない窓口では、少しは省力化できていると思いますが、先ほど言いました通り、その後のアナログ部分がまだまだ多いですから、どこまで窓口の待ち時間が圧縮できているかという、まだまだこれからというところです。

(安田会長)

高田委員がおっしゃったように、市民がDX頑張っているな、と感じられるようなところが本当に大事だと私も感じていましたので、今のお答えの中で少しずつ進んでることなので、その進んでいるところを発信するだけでも、市民の皆様が頑張れとおっしゃるかもしれないので、ぜひ、こんなことを考えていますということを発信されると思います。

それとDX座談会でもいろいろと成功事例を広められているとのことで、本当に期待したいと思いますし、そういう取り組みが本当に大事だと思います。

職員の皆さん違うセクションかもしれませんが、その方たちから便利だということがじわじわと広がっていくという、そのチャンネルを引き続き有効に使っていただければと思います。

それでは藤川委員よろしく願いいたします。

(藤川委員)

これだけの数の多い施策を毎年伺っているのですけれども、着実に進められていらっしゃるというのは大変素晴らしいと思って聞いておりました。

私も先ほどのフロントヤード改革にはなりますが、おっしゃる通り標準化が終わってからこそ、こういうものは威力を発揮してくるのかなと思うところで、フロントヤードと申しますけど、やはり自治体としてはバックヤード改革、これから進めていくところのかなと思って聞いておりました。

そしてもう一つ素晴らしい取り組みだなと思っているところが、LINE公式アカウントでアプリケーションを刷新したというところで、1万人を達成されたというところかと思っています、やはりこういうアプリケーションは使ってもらって良さが得られるというところかと思っています、こういうものも便利になったということ、市民の方が気づくところだと思いますので、ぜひ見てもらって自分たちにとって無関心ではなく当事者意識で情報を見てもらうということが重要かと思うところ、それに対してこの絵にあります通り、アンケートの分析をしてどんな声を市民の方が持っているのかということ、フィードバックを受けることができるというのが一番重要かと思っています。

やはり先ほどから話がありました住民の方がどう思っているかというところを見える

化できるというところ、Well-Being 指標であったりそういったものも活用して、住民の皆様がどう、幸福度を上げてきているかということも図っていただければと思っております。

伺いたいところが、6 番のマイナンバーカードの普及促進のところなのですが、私も長い間カードの普及のところ自治体様と一緒に考えているのですが、マイナポイント以上の施策がなかなかなくて、次に始まってくるのがオンラインでの医療費助成証とか、こういったものが始まってくるというのが国策として進んでいく中で、自治体様固有で、次のキラーコンテンツといいますか、こういうところやったらいいのではないかというお考えがもしあれば、ぜひ教えていただきたいと思いますのでよろしくお願いします。

(事務局 梶田情報政策課長)

マイナンバー利用促進で一番簡単なのはやはり何かしらのポイント付与とかに、最後はなってしまうのかなと思いますが、マイナンバーカード利活用についてはプロジェクトチームで検討しています。

他市町では複数のカードをマイナンバーカード 1 枚に集約するというをしているところもあります。今まで瀬戸市はどちらかというとアナログで運用していて、カード化しているものがなく、今行っている健康事業であたり市民に還元しているようなものを、電子化していくことをプロジェクトチームの中で話はしていますけれども、なかなか今までのやり方を変えるのが現場も大変ですし受ける側もマイナンバーカードがないと受けられなくなるのかということも整理しなくてはいけないというところで、悩みながらみんなで知恵を出し合っているところです。

(安田会長)

国も自治体も民間も含めて、どう普及させるとしても、キラーコンテンツがあればみんなでシェアしたいですね、引き続き頑張っていきましょう。

続きまして原委員よりよろしくお願いいたします。

(原委員)

11 番のオープンデータの提供と利用促進、これに少しかかることかと思いますが、実は今私、防災関係担当をしております、地域防災計画とか地域避難計画、それらを準備している最中です。

避難するにあたって、その地区の特性によって、どこに避難するかそれとも自宅に留まるか、備蓄品は非常持ち出しのものをたくさん用意するか、それとも家で籠城したい人は、家で籠城するようなものを、多めに準備するか、そういう形態、事情によって避難計画も変わってきます。

瀬戸市さんが出されている地域防災カルテというのがありましてね、これ非常に優れた資料で、マップの中に古いお家がどのぐらいあるか、視覚で示したもの、人口動態がど

うなっているかというもののなのです。

これを活用して、具体的な計画を作っていきたいと思っているのですが、残念ながらこの地域防災カルテは、10年くらい前に作られたもので、先日危機管理課さんの方にご相談しまして、これ非常に有益なものだけど、新しいバージョンが出るのか聞いたら、とてもお金がかかるから、なかなか出来ないねっていう話なんですよ、その事情はよく分かります、ただ11番のオープンデータの利活用を考えてみますと、建築許可もあるし、物ができたら登記もするわけですから建物というもののデータは市役所か法務局かは分かりませんが、必ず全てのお家のデータがあるはずです。

そのデータを持ってくれば、わざわざ調査をしてそういったカルテを作らなくても自動的にできるじゃないかと思うところですね。

そういうデータの集め方も工夫して、使いたいように加工して地図上に載せるっていうことができれば、すごくありがたいと思いました。

(安田会長)

結構素晴らしいご提案だと思いますがいかがでしょう。

(事務局 梶田情報政策課長)

そのデータを公開するには建設関係に確認を取らないといけませんが、確かに今避難所と備蓄品の情報というのは、オープンデータとして出しており、他市町ではそれを有効活用するためのアプリを作られて、防災訓練とか、それを使ってどこはトイレがいくつ、備蓄品がどれだけあって、ここはどのように逃げるとかをやってみえたので、そういったことも汎用で出てきて使えればと思っています。

そういった取り組みをしていますが、今言われたみたいに、ここはちょっと倒壊の危険があるとかそういったところまではまだできていません、ただ今我々が公開しているオープンデータは位置情報を持っており、それをGoogleマップをとおして、くらしの便利地図に連携しています。今まではオープンデータを直して、かつくらしの便利地図も直してという、二重で直して直し忘れがあったりとかですね、即時性がなかったりということがあったのを、最新のオープンデータを毎日バッチ処理でくらしの便利地図と自動連携するように去年仕組みを作りましたから、それを活用すれば確かにその元情報が出せる情報でオープンデータ化していいものであればそれを展開することはすぐできると思いますので、関係課と協議し実現できる可能性としてはあると思います。

(原委員)

今朝のNHKのニュースでも松山市の例が出ていまして6年前から西日本豪雨で、すごく大きな被害が出た、その被害がたくさん出た危険な地域にまた人が集まってきて以前よりも増えている、それはもう地価が安いからとか、利便性があるからということなんですけどこのニュースを聞いたときに瀬戸市は意外に災害がなく地盤も固いと思いましたね、地価も安いって、そうすると、そういう情報がハザードマップの逆検索をすると、

全然揺れが少ないみたいだね、そういう情報も業者さんとか、住処を探している人が取れるようになれば、瀬戸市のブランド価値が上がるのではないかと考えていました。

(安田会長)

とても良いご提案をいただいたと私は思っています、これデータ流通基盤の話が各自治体にいろいろ動いているところがあると思いますが、なかなか現実問題進みにくいところがありますよね、それは多分都市OSというとても大きな文脈の中から実行させようという動きがあるって、そこはかなり難しいなと私も感じているところがあって、ならばどうするかというときに、やはりできるところからデータ連携をしていくということころしかないかなと思っていますいくつかの自治体はそのヘルスケアでやろうという話があるのですけれども、ヘルスケアになった段階でプライバシーとかの話になってきて、そうなったときにどういう議論が起こるかという、レベル分けしましょうという議論になってくるんですね、これ今の話と同じと思っていて、住宅の情報というのが10年前で止まっているとの話があって今のご提案は、いや、新築の申請は必ず市役所に来るはずだからそのところを利用すればいいのではないかと話でしたが、それに対して非常にプライバシーの問題があるってこともあったと思います。

デジタル化してプライバシーに関わらないところに関してはオープンデータ化するかどうかは別として少なくとも今の地域防災管理者には連携させるということは可能かなと思いますので、ご検討いただけるとのことでしたので原課さんと調整いただいて、デジタル推進の皆さんとしては、こういうところを一つずつ達成していけるといいかなと思いますので、期待したいと思います。

続きまして寺田委員よろしく願いいたします。

(寺田委員)

去年の最終のところと、だいぶ簡素化されているので、前回、例えば町の活性化を推進するとか、Wi-Fiの環境整備が終わってその結果がどうなったかとか、その辺がちょっと、自分の中で読み取れてない中でいろいろと質問させていただこうと思います。

この4番目の情報発信のアプリの利用促進とか、1万人の登録を達成して、令和6年度は新基盤の運用によりさらなる利用促進を図る、8番メタバースもアバターが11,500人だった、今年いろいろな団体企業のブースと書いてあるが、どうやってやるのかというところが計画としては、どうやって本当に増やしていくのかとかそういうのがちょっと見えないので少し補足の説明をいただけたらと思います。

(事務局 梶田情報政策課長)

情報発信アプリに関しては、システムは整備されており、利用者も順次増えてきている中で、利用する市民の皆様が何を求めているか、せっきくの双方向のLINEアプリなので、そのアンケート分析を行っていき、より皆さんが必要としている情報を発信することで、利用者増加を目指していこうと進めています。

また、情報発信側も投稿しやすくなっていますので、利用者が必要だと思うことをより早く提供し、より使いやすいたっていただけるよう進めていきます。

メタバースですが、寺田委員がおっしゃっていたように、E Cサイトで写真を掲載しても、実際届いたものが、思っていたものと違うということがないように、メタバース空間で、3Dコンテンツでそのあたりが補完できればと考えています。

去年から計画している企業ブースにて、企業用の場所を用意しているので、展示場を設け企業の方と一緒にメタバース空間内にて3Dで作成した商品を実際に見せ説明をしていただける企業様を今年度探し、実行するべくメタバース内のパーティセと内に今構築していますので、そこからE Cサイトに連携し販路を開拓、拡充することができればと思っています。

(寺田委員)

ありがとうございます、このメタバース来訪者の1万1500人というのが他市町と比べてどうなのかとか、成功している他市町の事例とかがわからないのでそれを咀嚼して、瀬戸バージョンもさらに良いものにしていくことをすごく感じています。

前回もお話ししましたが、今我々の伝統産業の世界で後継者がいなくて、いわゆる町の中華屋さんでも店主さんが亡くなり同じ味を出せないというのと一緒に、もうその色が出せない、その形が出せないというのも、何か上手な形でアーカイブを残していき、我々も今責任世代として次の世代に瀬戸1300年の歴史を伝えるというキラーコンテンツを作成すれば、他の市町も欲しいコンテンツだと思います、それを上手に型の取り方だとかですね、いろいろ焼き物産業はそこまで大きくない広くはないでしょうけど、やはりいろいろと分業されているので本当に途絶えてしまうとやりようがないですから、そういうものを上手に連携してやっていけるようなものを何か一つどこかに組み込んでいただけると街の活性化の一つに繋がっていったりとか、やはり自分の住む街に生まれた子達がまた戻ってきってくれるようなことも重要なかなと少し思いましたので発言させていただきました。

(安田会長)

メタバースのE C活用はぜひ瀬戸市さん、これからも引き続き検討していただきたいと思っているのですが、今寺田委員がおっしゃった最後のところですね、伝統産業として伝えるためのメタバースの活用も、瀬戸ならではの利活用だと思っています。

まだ実現していないのですが、中部圏では製造業が盛んで、製造部のあり方をメタバース空間を使って、その製造のプロセスの工程の逆戻りをさせないような、つまりデザインとか試作の段階で、工程の部分の方も入っていただいて、初期段階で新製品の不具合がないかのチェックをメタバース空間の使い方の一つあるんじゃないかということを今、中部経済連合会の方と水面下で検討しています。

このメタバースというのはB to Cの世界だけでなく、B to Bの世界でも当然利活用できると思っていますので、瀬戸市ならではのメタバースのB to Bの活用方法と

いうところも、何かの機会で産業関係の部署とも少しご検討いただくとデジタルの分野からこういうことが使えるのではないかと、投げかけていただくのもいいのかと思いました。

伝統産業を守るといふことと、新しい制度のあり方をデジタルを使ってやっていくというデジタルと伝統産業の掛け合わせで、すごく関心があるところで、成功すれば全国的にも注目されることになるかなと思ひ感じさせていただきました。

(寺田委員)

瀬戸市も六古窯といわれ千年以上の古い窯の一つに数えられているのを、あまり上手に使えるのかと。

安田先生がおっしゃっていただいたものでうまく連携して新しいものに使えるといいのではないかと思います。

(安田会長)

今日の資料でも観光情報発信と書いてありますので、ぜひそういうところを広げていただければいいかと思います。

それでは駒田委員からもよろしくお願いいたします。

(駒田委員)

私からは教育の状況を少しご紹介させていただきたいと思ひます。

4月から現職ですが、これまで学校訪問がありまして、いくつかの小中学校へ訪問しました。概ね40年ぶりに自分の母校である中学校へも伺い、校舎なんかは全く当時のままでしたが、当時と大きく変わったと思ったのが、1つは、各教室にエアコンがついたということ、もう1つは授業風景が変わったということを感じました。

自分の子供もその学校を卒業しましたが、授業参観などで年に1、2回行きましたが、そのときと比べても、やはり授業風景が変わったと感じました。

授業では、子どもたちが全員タブレットを持って、先生は電子黒板を使い授業が進められているといったように、教育D Xと学校I C Tの取り組みが進んでおり、その活用事例を児童生徒と教職員の区分に分けて紹介をさせていただきたいと思ひます。

まず児童生徒、場面としては、家を出てから授業前ぐらいの場面のところですが、現状、タブレットを全ての児童生徒が家に持ち帰っています。

当然、学習内容であったり、予定であったりをタブレットから確認できますし、欠席された子供もそれを見て確認することができるという形になっています。

またタブレットには、心の天気という機能があり、毎日子供たちがその日の気持ちを入力する、「晴れ、曇り、雨、雷」のいずれかを入力し、担当の先生の方は当然ですが、校長先生たちも共有することで、雨や雷の子ども達には、校長・教頭先生が声をかけるといったことも行われているそうです。

2点目として、子供の視点ですが、家庭から授業中、放課後もそうですし、休憩時間に

において、タブレットを通じて相談できる機能を本年度から全体的に導入しました。相談したい先生と、相談したい内容を選択できるようになっており、やはり人前では相談しづらいことであったり、担任の先生には話しづらいこと等についてもタブレットを活用して相談できるということも聞いています。

児童生徒の最後が授業後から家庭のタイミングになりますが、タブレットを持ち帰り、ドリルアプリであったり、レポートを作ってみたり調べの学習というのには効果的に活用できますし、欠席した子も同様に使用できる形になります。

また、そのドリルアプリ学習ソフトの提供会社の学力テストを受けると、その結果に応じて、ドリルの問題を改善していくというシステムになっているということです。

次に教職員の立場からですが、タブレットを持ち帰り、それを家庭との連絡ツールとすることで、出欠の確認が圧倒的に簡素化されたということです。

保護者からの連絡をタブレットで行いますので、まず電話がなくなったということで、保護者の利便性も向上し、保護者の方からも確実に連絡でき好評ということだそうです。

今年度の1学期間で3万3000回以上の欠席連絡がありましたが、電話ですと1件当たり3分と計算しても1700時間くらいは業務が削減できた試算をしております。

先生の視点のもう一つは、授業後になりますが、テストの採点も採点支援システムを導入しており、アンケートのデータ処理をWebで行っていますし、生徒会の投票にも利用されています。

瀬戸市では菱野団地で、3小学校の統合を進めており、その事業内容についてPTA総会などで従来どおりの説明会を実施した後、参加されなかった保護者も含め全員にウェブを活用したアンケートを実施し、その結果をホームページで公表するなども合わせて行っています。

教職員の業務において、時間の縮減になっているということで、目的の一つである働き方改革が今進んでいるという状況です。

(安田会長)

ありがとうございました、多分教育委員会の駒田委員のご意見に関しては市役所がというよりも、委員の皆様の方で何かご質問等あればお願いします

(寺田委員)

瀬戸市ではかなり早い段階で子供たちのタブレットを導入していただき、アプリケーションを使っていると思います、それも全市的に、しかし、その更新のときにどれぐらいお金がかかって、その辺が妥当なのかもそうですけど、にじの丘学園ができる前に教育委員に就任していましたがその3年後にコロナ過がありまして、その時の子供たちは常にマスク着用で話をしてはいけない、とにかく口コミュニケーションを取るなどと言われていたので、今の4年生ぐらいから上の子たちは挨拶がなかなかできない子がすごく多いんで、それと本件となかなか関連性はないかもしれませんが、何とかしていただきたいと、あとこういう仕組みでどこまでできるかわかりませんが、もうすぐ夏休みが始まりま

すが、長い夏休みになるとやはりリグレクトの家の子が給食がないので食べられないんですねご飯を、まともな一食というのが、給食だけの時もあり、給食センターの皆さんがすごくバランスを考えて、本当に低予算で調理をしてくださっているのですが、それが食べられなくなるものですからやはり、子供食堂だとかいろんな情報とかをうまく活用しながら、何とかそういう子供を少しでも助けられないかというのを個人的に思います。

(安田会長)

大変重要なお指摘、大きな問題ですけれども、すぐにお答えできないかもしれませんが、駒田委員ご意見としてお持ちであれば、一言お願いします。

(駒田委員)

今まさに言われた通りなのですが、7年度以降の予算をどうしていくのか、どういう予算内容を計画していくのか、瀬戸市全体の事業の中でいかに予算を確保していくのか、どこを狙っていくのかというところをしっかりと検討しているところです。

教育D X以外にも、お話にあった学校給食に関しては児童・生徒の栄養摂取、成長につながる事案となりますので、どの予算をどうやって要求し獲得していくかというのを考えています。

(安田会長)

ありがとうございました、給食の部分はデジタルでは難しいかもしれませんが、予算の話はどこかに影響する話なので、ぜひ教育委員会からも強く予算要求をしていただいていいものは進めていく必要があると思います。

私から駒田委員に質問ですが、今日いろいろと丁寧にご説明いただき、いいなと思ったんですけど、運用に関してこのデジタル化でかなり上手くいくと思うんですけども、デジタル人材育成が大丈夫なのかと心配に思いましたが、これからのデジタル人材育成を瀬戸市はどうしていく予定でしょうか、SetoCGKid's という本当に有名で誇れるものがあるんですけども、これ1本でいいのかどうか、もう少しデジタル人材をどう瀬戸市で育成していくかの議論を始めてもいいのではないかなと思うんですが、この辺りの状況はどうでしょうか。

(駒田委員)

教育委員会ではキャリア教育事業を過去から力を入れて行っておりまして、商工会議所さんと共同して多数の充実した事業を毎年実施しております。

この事業では実際の事業所での職場体験をはじめとして、講座や研修等が盛り込まれており、キャリア教育として効果的な取組であると考えておりますが、その中でD X関係の体験もありますので、そうした部分は5年、10年前はなかったと思いますので少しずつですけども、瀬戸市の教育委員会としても力を入れながらやっているというところではあります。

(安田会長)

ありがとうございました結構いろんな自治体さんと話をしていると、子供たちのデジタル人材育成をどうするんだって結構主要なテーマで議論されることもあって、私は結構そういう会議では、SetoCGKid'sのことを宣伝してくるんですけど、最近コンテンツはもちろん進んでいるんですけど、デジタルというところで、プログラミング教育で止まっているところがほとんどで、やはりデジタル人材を考えたときにソフトウェアだけの世界だけではなく、実世界とどう繋がるかというところで、そのプログラミングが実世界にどう影響するかというところでいろいろやっているところもあるんですけども、こんなところも含めプログラミングと実世界との連携みたいなところで、デジタル人材をどう育てていくのかを中学校小学校レベルで瀬戸市の教育委員会として、お考えいただけると大変ありがたいなと思いますので、ぜひよろしくお願いいたします。

それでは大森委員よろしくお願いいたします。

(大森委員)

瀬戸市の情報政策課の方は、この18項目を、年間通して非常によくやっていただいているという認識を持っております。

ただこの項番の15、16、17、18のところが、我々に直接関係する部分かと常日頃思っておるところでございます、テレワークの環境整備、これも完全に終わっておりますしWi-Fiの整備、こういったものも終わっております。

ただ、テレワークの環境整備というのは、コロナ過が最盛期というか流行っていた頃は職員がこれを利用し、テレワークをメインで有効な手段であると認識していたんですが、現在テレワークをどれぐらいやっているかということと非常に少なく、対面式に全て戻ってきて、ウェブ会議も、コロナ過の時期には密がいかにということで、各部屋に分かれた環境で会議をやっていたんですが、今どうなっているかということとやはり対面式に全て戻ってきているというような状況なんです、この使い方を覚えてそれを維持するというのが非常に難しく、なぜ難しいかというと、リスクは皆さんすぐにわかるのですがリスクの面だけが非常に表にでて、このデジタルから徐々に遠ざかっていくというような考えを持っておりますので、これをもっと強制的に環境の中に入っていけないことには市民の皆様にも大きなことも言えませんし、最近では近隣の市町村では働き方改革とDXの推進、これらを万全を期して行ない週休3日制といった話も出てきています。

それは何を伴っていくかということ、やはりこういったDXの推進もしかりですけども、やはり職員のDXに関する考え方、それから市民の皆様の理解といったものがマッチしないとなかなか週休3日制などとの言葉を市民の皆様に言った途端に、市役所が仕事をやらないというような考え方も見せてしまうようなことになります。

そういったところからすると今、情報政策課が一生懸命方向立てをし前に進んでいるところですが、やはり職員がもう少しDX推進に足を突っ込んでいかないと難しいのではないかと今、皆様のご意見を聞きながら、ひしひしと考えているところでございま

す。

また瀬戸市の市民の皆さんも非常に理解度が高い方がお見えですが、どうしても高齢者の方が近隣の市町村に比べると多数お見えになります、そういった中で、やはり苦手意識を持たれてしまうとなかなか進まないというのが常でございますので、我々のデジタルデバインドとこういったところをもう少し推進しながら、同じ世代の方が先ほど先生がおっしゃったように、子供の世代でもやはりそれは言えると思いますが、高齢の皆様の中でも、こういった対策をしっかりやっていかないと、市全体のDXの感覚が上がっていかないのかというのを、皆さんのご意見を聞きながら強く感じるところでございます。

(安田会長)

ありがとうございました、やはりコロナ前に戻ってきてしまっているという話はよく聞きます。

一方で民間企業ではフルでオンライン業務をしているというところもありますので、リスクはもちろん伴いますけれども、そこは先ほど申し上げた通り、リスクのレベル分けをしていただいて、リスクがそれほど伴わないところであれば、ぜひ働き方改革にも繋がりますので、副市長が先頭で音頭を取っていただけると多分皆さんついていくのかと思いますのでぜひ進めていただければと思います。

それでは後藤先生にまとめていただこうと思いますよろしくお願いします。

(後藤副会長)

まずいろいろなご説明も含めてありがとうございました。

お話を聞いておりまして、まずは今までやってきたことが、確実に環境整備の面とかではどんどん進んでいってしかもそれが実際に活用されていたり、あるいは浸透し始めているなということが、まさに実感としても湧いているところがあります。

今、全く聞かなくなりましたけどユビキタスなんていうことはありましたけれども、使っているのかどうかをあまり意識しなくていい状態でどんどん浸透していくみたいなのところも性質としてはあるのかなとは思うんですけども、やはりフェーズとして、今お話を聞いていまして、中身のコンテンツであるとか、あるいはどうデザインしていくかとか、あるいは行動をし、住民市民の方々の生活にどう浸透していくかみたいなのところのフェーズにいよいよ来たなというところを実感しながら聞いておりました。

私も先ほど言ったように地区の組長をやるということになって、組長という仕事は忙しい場合は、多くの人ではできればやりたくないと思うことが多いですね。

私も間違いなくそういう考えもあるのですけれども、ただ、その立場になってみると初めて考えることもあるんですね。

それってすごく重要で、積極的にどんどんいろんな意見を出してくれる人ももちろんいるでしょうけれども、何かその立場になるといろいろ調べたり聞いたりすることによって、何か考えが、思考的にそうになっていくということもあると思うので、その人たち、あるいはその状況になった人たちをうまく活用するということがもっとできるというの

かなと、いろいろ聞いていて思いました。

例えば集まりで隣に座った方が、なんかもうちょっとこういうことができるといいと思う考えを熱く語ってくださるのですね。

こういう方々がいっぱいいるのだからというところをまず知ることができるし、その意見をその方は多分、私には言ってくださいますが多分他の方には言ってみえないので、おそらくそれはもう流れてしまうことなのだと思います。

どこかでその方がかなりエネルギーを持って何かをやらないと、それが実現しないとなると、それは多分かなりしんどいことだと思いますので、通常それは立ち消えていくことだと思います。

DXの強みを活かすためには、その立場になった人たちが集まっているわけですから、そういう集まりで何か例え5分でも10分でも、何かそういう意見をデータベースなんかで集約するみたいなことをしていくといいのではないのでしょうか。

この前も地区の運動会もありましたし、ああいうところで子供たちもいろいろ参加しているんですよね、すごく多くのみんながスマホを持っているのでQRコードを置いておいて何かそこでアンケートでも何でも意見言ってくれたら、パン1個あげますよ。

いろんな工夫って多分できると思うんですね。

なので、日々の生活の中である既にある関係性とか横の繋がりみたいなものっていうのは、もう構築されているっていうところをうまく活用して、そういった日常の中での情報をどんどんデジタルの方に吸い上げていって、そこをうまく分析するなりあるいはそれを最終的にはAIに学習させてもいいのかもしれないですね。

そうすると、市民側の声がじわじわと、こういったDXの取り組みみたいなものに結果的に反映されていくのではないのかなっていう気がしています。

そういうものに一步踏み出していくという、まさに現場の声というかこちらから出て行って、何かこう声を聞かなきゃいけないみたいなのところも、おそらくあると思います。

庁内で進めるDXもある一方で、市民側の方で何か取り組んでいるところに目を配るというかそこに目を付けるということが多分重要で、目を向けた上で、先ほど言ったような何か仕組みみたいなものが用意されているだけで、ずいぶんと回り始めるものもあるのではないかという気が、聞いていてしました。

市役所もDXによって、来なくていいという人もいてもいいと思いますし、来た人が早くできるっていうことも重要だと思いますし、来た人がよくわからないからもっとしっかり説明を聞くということも重要だと思います。

しかし発想としてなかったのが、来たい市役所ってないのかなって思ったのですね。

市役所って普通は来たいと思う場所じゃないのかもしれないけどただ、メタバースとかアプリとかうまく使うとそれも可能なのかもしれないなってちょっと聞いていて思ったところがありました。

そういったワクワクするような情報も含めて、実は市役所がお持ちだと思いますが、それをワクワクする形で出すというデザインができない部分っていうかそのひと手間がなかなかかけられないところがあるのではと思います。

そういうものがDXの文化の中にどんどん浸透してくると、瀬戸市ならではのDXにさらに発展していくのではないかなって、そんなことを考えながら話を聞かせていただきました。

(安田会長)

来たい市役所にコメントいただけますか。

(事務局 梶田情報政策課長)

私的にはどちらかというも行ってもいいという、コンビニだとかドラッグストアのような、必要性があるし行っても別にそう面倒くさくないからいいと思える市役所がいいなと思ったのですが、来たくなる市役所、ちょっとまだ想像ができないのですが、今後の参考にさせていただきます。

(安田会長)

後藤先生の話の中で後藤先生は副会長でやはり瀬戸市の重要なステークホルダーでもあり、原さんも重要なキーパーソンです。

先ほどの後藤先生の話の中でいろんなキーパーソンを含む、その地域の人っていうか市民の皆さんがいろいろとご意見を出し合っているところをうまくデータベース化してそれをシェアリングできるような、そういう仕組みになってもいいよねっていうご提案をいただいたと思います。

そういうところはいきなりには難しいかもしれないのですが、できるところからそんなことをしていただくと、瀬戸市全体でのデジタルのレベルが上がっていくのかなと感じましたので、できるところからそんなこともしていただければいいかなと思いました。

私からは皆さんのコメントについて一言一言申し上げさせていただきましたので、ほとんど言い尽くしましたけれども、やはり冒頭、寺田委員がおっしゃられた市民の皆様に対して瀬戸市のデジタル推進の進行度が目に見える形にもっとできたらいいのではないかとご指摘をいただいたと思うのですが、これもとても大事だと思っていて、LINEの話があってこれが一つ良かったと思いますが、やはり市民の皆様に対して、皆さんの頑張りをアピールするやり方をもう少し考えてもいいのかなと思ったのですが、いかがでしょうか、もう少し何か考えられないですかね。

(事務局 梶田情報政策課長)

そうですね、今のところだとホームページにおいてこの協議会の結果資料を載せるであるとか、ここでご助言いただいたことを公表するとか、こういったことをいかに見てもらうかということになりますが、なかなかそれを伝えるということがうまくできていないので、逆にどうしていくといいのでしょうか

(安田会長)

どの時代もそうですが、やはり網羅的な説明を委員会ですることは大事なことだと思いますが、市民の皆様向けに今年度はこんなことをやりましたっていうのを、二つか三つフラッグシップになるようなものを見せていき、そういうものをしっかりとお伝えしていく。

もう一つちゃんと進んでいるよっていうことを、市民の皆様伝えて応援団になってもらえれば、各課でデジタル推進をしている人たちを勇気づけられることになるのではないのでしょうか。

まだ少し時間がございますので、皆さん言い残したことがあればぜひ挙手いただいて、いかがでしょうか、事務局側のご質問でも構いませんし、皆さんのコメントに対する何かコメントでも構いませんけどいかがでしょうか。

(穴山委員)

今年度のスケジュールでは、もう既に6月ぐらいに1回目のDX推進座談会が行われたようなので、何か成果とかあったのでしょうか。

(事務局 梶田情報政策課長)

RPAの事例紹介であるとか、フロントヤード改革について国から最優先課題として出てきているところなので、皆さんにも関わるところで意識を持ってもらわなければいけないところであり、北海道の北見市などを例に挙げ、何のためにやったかというところから、我々としてどうして必要なのか、自分たちが課題を持って一つ一つ解決していかなければいけないことなどを話し、現在通常業務で忙しい人たちもこの5年10年先に職員が減ってきたとき、今の若手たちのために何とかしていこうということを座談会では伝えているところです。

(安田会長)

ご説明ありがとうございます。やはり大事なところだと思うんですね。
年に2回ですね。

(事務局 梶田情報政策課長)

以前は年に1回だけでしたが、6月と2月の年2回にすることにより6月に出た意見がシステム化できそうであれば翌年度予算に計上できますし、2月には6月の意見がどう進捗したかの結果をお伝えできるということで今は2回行っています。

(安田会長)

今日も有意義なご意見いただきましてありがとうございました。
それでは進行を事務局にお返ししたいと思います。

(事務局 梶田情報政策課長)

委員の皆様今回も有意義なご意見、ご示唆、ありがとうございました、これまで同様の協議会の内容につきましては資料と共に議事録を市ホームページに公開させていただきますので、お手数をおかけしますが、議事録に関しては、後日皆さんにご確認していただきますのでご協力をお願いいたします。

次回第2回は書面開催としまして、10月頃をめどに中間報告をさせていただきますのでよろしくお願いいたします。

閉会にあたりましては、副市長から一言御礼を申し上げます。

(大森副市長)

安田会長、後藤副会長今日は慎重審議及びご進行ありがとうございました、またご参加いただきました委員の皆様も瀬戸市のためにということでたくさんのご意見頂戴いたしましてありがとうございました。

我々は1年後には標準化を控えており、今それに対する準備を進めているところです。今まで個々にシステムを構築していたために、標準化するには莫大な費用がかかるということですが、これも世の中の大波に瀬戸市もついていくという意味ではやらなければならない、また市民の皆様にも御理解をいただかなくてはいけない大きな業務でございますので、DX推進協議会の皆様にもご理解をいただきながら、遅れをとらないよう進めていきたいと思いますので、今後とも協力のほどよろしくお願いいたします。

本日はありがとうございました。

(事務局 梶田情報政策課長)

これにて、令和6年度第1回瀬戸市ICT活用・DX推進協議会を閉会いたします。

以上